

『ディオニシウス神名論注解』に基づくトマスの神名論

—transcendentia と神—

浦 英 雄

トマスの超越的一般者 (transcendentia) について、認識論の側面からの接近¹⁾とは別に、神名論の側面からの接近も可能である。『神学大全』第 I 部第 13 問でのトマスの神名論は、第 2 問から第 12 問までの、神の本質を規定する議論を前提としており、それらを一括して一つの神名論の文脈と見做すことができるが、この文脈の中で、超越的一般者の特徴である *ens, bonum, unum* の置換説が展開されているからである。また、トマスが神の名について語る第 13 問 (a. 11, c.) には、*Qui est* についての次の二つの規定を見出すことができるからである。①「*Qui est* という名は、存在のいかなる様式をも限定せず、あらゆる様式に対して無限定的にある」。②「*Qui est* という名と、それ以外の名とは置換される。しかし、*Qui est* 以外の名は全て、*Qui est* という名の上に概念的に何かを付加する」。①の規定に見出される、存在様式、即ち、範疇に限定されないということは、超越的一般者の特質を示すものであり、②の規定は、*ens* と *bonum, unum* は置換されるが、後者は前者の上にそれぞれ概念的に、望ましいもの、不可分なものを付加するという超越的一般者の規定と酷似している。むしろ超越的一般者の特徴が、積極的に神名論の中で採用されていると言えよう。

それでは、超越的一般者を神名論の文脈の中で見た場合、トマスが超越的一般者をどのようなものとして理解し、それにどのような役割を与えていたと言えるのか。*ens, bonum, unum* 等、超越的一般者に込められた「超越性」の意味は、勿論どの範疇にも限定されないということである。しかし、それに尽きないのではないか。即ち、どの範疇にも無限定的であるという事態を成立せしめている何らかの根拠がある、と考えるのではないか。あるいは、どの範疇にも無限定的であるという事態が成立する時、この事態が映し出しており、この事態に対応する何らかの実在があるはずだ、と考えるのではないか。とすれば、トマスが超越的一般者を語る時、彼はどのよう

な実在を念頭に置いていたのか。こういった点を、『神学大全』第Ⅰ部と同時期に書かれた、正に神名論の文脈を提供してくれる『ディオニシウス神名論注解』²⁾を検討することによって、考察していきたい。

I 〈神 認 識〉

対象に名を与えるのは人間知性であり(29)、命名は人間知性による認識を前提としている。対象に賦与された名は、認識を明示する知性の印として対象を表示する(84, 731)。しかし、その表示は命名の前提たる認識の鮮明度に応じた制約を不可避免的に受ける(29)。それ故、神名について考察するためには、まず前提となっている認識の問題を規定しておく必要がある。このような、『神学大全』にも見られる神認識から神名へという考察の手順を、トマスはディオニシウスから学んでいる(40)。

『神名論』でディオニシウスが扱った神名とは、全て聖書に由来する名であり、聖書の神名が神認識の情報源となっている。聖書の神名が我々に与える神についての情報とは、①聖なる光と全ての善性ないし完全性の拡散、②この拡散の根源自体、の二点である(45)。聖書により我々は、例えば神を「生ける者」と賛美することを知り(44)、この記述に基づいて、神から被造物への生命の発出が行われていることと、その発出の根源が神であることを認識する。しかし、このような認識は人間による神探求の出発点となるにすぎず、神を実体的に認識したことにはならない。なぜなら、神についての記述である②の情報には、発出の根源が存在することを告げるのみだからである。①の情報は、二種類の分有、即ち、人間知性が神の知恵の光を分有して認識能力を備えた状態にあることと、知性の対象となる事物が神の完全性を分有して存在していることを意味するが(177)、この二種類の分有に基づいて、即ち、認識主体および客体両面での準備段階を経て、知性は更に原因としての神の実体認識へと進む。

「我々の認識は全て知性や感覚によるのであり、存在者のみを我々は認識する」(723)とトマスは言う。人間知性に適した認識対象は被造物の有限な存在者であり(29)、認識能力も有限である(72)。では、知性と感覚を超え全存在者を超えている神を、知性はどのような方法によって認識し得るのか。トマスはディオニシウス同様、「全世界の秩序から神を認識する。なぜなら、正に被造物全体が、それによって我々が神を認識できるようにと、神により我々に提供されているのだから」(729)と言う。被造物を通しての神探求という方法において両者は一致しているのである。しかし、

被造世界に端を発する知性認識は、あくまでも有限者に関わる知識のはずである。にも拘らず神認識を意図するというからには、そこに観点の移行を促すものがなければならぬ。それが類似性という視点からの世界把握である。被造物を通しての神認識は、被造世界が神の類似性を所有するものとして捉えられることによって成立するのである (729)。従って、神認識は類似性認識の様相を帯びているので、神認識に関して次の二つの局面、即ち、「完全性の発出」と「正に神たるもの (hoc ipsum quod Deus est)」とを問題にしたい。

被造物を通しての神認識は、除去、超過、原因性よりする三つの手続きによって進められるが、この内『神名論』において特に重要な原因性という手続きは、「被造物内にある何であれ全てのものが原因としての神から発出すると我々が考察する」(729) ことである。被造物内に認められるのは完全性であり (50)、被造物へと発出する完全性とは「神の本質の類似性」(158) である。被造物は「神の類似性への関係」(158) を所有しているものとして捉えられ、「被造物に刻印された神の類似性」(220) に即して様々な発出が確認されるわけである。このような発出は可知的発出と呼ばれ、そして、この発出に基づく完全性は可知的完全性と呼ばれるが、具体的には善性、存在、生命、知恵など複数のものである (104)。ところが、様々な完全性は全て、一層卓越した仕方では神の内の一つのものとして先在している (51)。類似性認識によって神は、様々な完全性が卓越的に単一の形態で先在している根源として認識されるのである。

しかし、聖書の神名を端緒に、類似性認識によって進められる神認識がこのような帰結に至っても、「正に神たるもの」は不可知な状態に止まる (41)。「正に神たるもの」という表現は、ディオニシウスの「 $\tau\acute{\alpha} \theta\epsilon\acute{\iota}\alpha$ (divina)」という用語を説明するためにトマスが与えた (41, 68, 712)、言語に絶する対象を取って表現するための言い回しである。神認識のこのような不可知性は、知性による認識が、神の本質そのものではなく、その類似性について成立することから根源的に由来する必然的な帰結である。そして、神そのものは知性の認識力の限界を超えた無限者 (infinitum) として位置付けられる (19, 75)。従って、神への命名は言語化を拒否する無限者への命名という困難、換言すれば、有限者の名を無限者にも賦与するという困難を孕んでいる。この困難はどのように克服されるのか。

Ⅱ 〈神の名〉

神認識が完全性・類似性に基礎を置いていたように、類似性を媒介として名付けの理論が成立する。即ち、「被造物の様々な完全性によって我々は様々な名を理解し、それらの名を我々はこれら全完全性の発出の第一根源たる神に帰する」(54)とトマスは言う。『神名論』での神名は可知的な名であり(322)、可知の完全性が神から被造物へと発出していることを明示する(261)、原因としての命名である(85)。この可知の神名の表示作用にトマスが与えている規定は、上述した困難を充分考慮に入れたものである。トマスによれば、「個々の名が、何かを、他のものから区別されたものとして限定的に表示する時、それらが神の述語となる場合は、何かを、有限な仕方に表示するのではなく、無限な仕方に表示する。即ち、被造物において理解される知恵という名は、例えば一定の類や種の内にあるものとしての、何か正義とは区別されたものを表示するが、知恵という名が神の事柄(divina)において理解されると、それは何か類や種に限定されたものを、あるいは、他の完全性との区別を表示するのではなく、何か無限なもの(aliquid infinitum)を表示する」(101)。

このトマスの主張には、二つの重要な点が認められる。第一に、同一の名に、対象に応じて二種の表示法を設定し、有限的表示、無限的表示の違いから、被造物と同一の名を神に賦与することを可能にしている。本来限定を意味する命名に無限定性を認め、つまり、限定しない表示法を設定し、二種の表示法を使い分けることにより、無限者への命名の困難が巧みに克服されている。第二に、様々な名が同一対象を表示することも保証されている。即ち、様々な神名の表示は、全て等しく「何か無限なもの」に向かっており、様々な完全性の無差別的融合状態を指し示す。様々な可知の神名の表示は同一対象に向けられており、相互間に区別はないのである。

さて、このように様々な可知の神名の表示作用は、等しく無限者としての神そのものを対象として機能しているが、反面、一つ一つの名のもつ意味は異なっている。つまり、神名の一つ一つが固有の意味を持ち、様々な角度から無限者を意味するのである。それ故、神名が複数存在することには意義がある。その様々な可知の神名の考察を、ディオニシウスがどのような順序で進めているかをトマスは推察しているが、トマスの記述を整理すると、トマスが可知の神名を次の七つに分類していたと考えることができる。

- ① 事物に内在する様々な完全性を絶対的に表示する神名(797, 847)(善きもの、

存在するもの、美しきもの、生命、知恵、力など).

- ② 事物に内在する完全性を関係的に表示する神名 (797, 847) (大と小, 同と異など).
- ③ 事物の存在や持続の普遍的根源として, 発出した完全性を表示する神名 (847) (全能, 日の老いたる者など).
- ④ 完全性の獲得による欲求の慰いを表示する神名 (847) (平和).
- ⑤ 完全性自体を抽象的に考察した神名 (876, 877, 925) (存在自体, 生命自体など).
- ⑥ 事物の支配を表示する神名 (939), 即ち, 摂理という性格に関する神名 (957) (神性, 主など).
- ⑦ 摂理の目的に関する神名 (957) (完全なもの, 一なるもの).

分類①から分類⑦への過程に, いわゆる新プラトン主義的な〈発出——還帰〉の構造³⁾を読み取ることができる. これについては後で共通性と摂理の観点から考察することにして, 先に, 分類⑤にプラトン派とディオニシウスとの差異が見られることを指摘しておきたい.

プラトン派が, 最高の神とは別に離存する抽象的の根源として存在自体, 生命自体, 知恵自体などを立て, これらがこの順に階層をなす別々の神々としていたのに対し, デイオニシウスはプラトン派の用語を多義的に用いている. トマスは「自体的」という言葉の意味を分析することによって, デイオニシウスの用語を二通りに理解し得ることを指摘する (634). 例えば「生命自体」という用語では, 1「自体的ということが実在的区別ないし分離を意味する場合, 生命自体とは神である」. 2「自体的ということが観点に即してのみの区別ないし分離を意味する場合, 生命自体とは様々な生けるものに内在している生命のことで, それは様々な生けるものから実在的には区別されず, 概念的に区別される」. 同じことが知恵自体, 存在自体にも妥当するので, 1の場合には, 知恵自体も存在自体も, 様々な知恵あるものや存在するものから実在的に区別された, 同一の神を指し示す. デイオニシウスは存在自体, 生命自体, 知恵自体を異なる根源だとはせず, 神たる一なる根源に統合しているのである (634, 933). また, 同じ用語を個物に適用する際は, 2の場合のようにアリストテレス流に, 個物に内在する形相的の根源として用いている (639). このような差異は, デイオニシウスがプラトン派のイデア論を, キリスト教的に修正して利用していることから生じたの

であり、トマスはイデア論を扱うに当たりディオニシウスに従っている。

Ⅲ 〈共通性と摂理〉

七つに分類し得る様々な神名の内、トマスは *bonum*, *ens*, *unum*, *Deitas* の四つを「特に神に適合する」名としている (212)。その理由をトマスは二つ挙げる。一つは「共通性」であり、もう一つは「名の使用」である。後者は、根源としての神を表示するのに、万人が四つの名を使用していることである。前者は、四つの名が神の本性の無限性に適合しており、類や種に限定されないことを意味する。しかし、無限性の表示という機能は、どの神名にも与えられているはずである。にも拘らず、四者が「特に」神に適合するとされる根拠はどこにあるのか。ところで、「類や種に限定されない」という性質は、他ならぬ超越的一般者の性質であり、四つの名の内 *Deitas* を除く三者は、正に超越的一般者である。更に、三者はトマスが認めた形でのイデア論とも重なっている。そこで、まず四つの名に与えられている「共通性」という性格が、具体的にはどのようなことを表しているのかを確認し、次に四つの神名を、イデア論、超越的一般者との関わりから捉え直していくことにしよう。

さて、四者の内 *bonum* と *ens* は上述した神名の分類①に属し、*unum* は分類⑦、*Deitas* は分類⑥に属す。*bonum* と *ens* の属す分類①には、他に *vita*, *sapientia*, *virtus* なども属すが、これらの神名に対応している発出する完全性の及ぶ範囲は、善性→存在→生命→知恵→正義ないし力、の順に狭くなるとトマスは考える (261-263, 610, 674, 741)。完全性の発出範囲、ないし、原因性の及ぶ領域の減少を、トマスは共通性の減少として捉えている。従って、最大の共通性を持つ、善性という完全性を表わす *bonum* が、全発出の共通な根源として普遍的発出を表示するとされる。これに対し *ens* は特殊な発出を表示するとされる (213)。ところが、特殊な発出を表示する *ens* の方が神名としては重要視されている。即ち、神名としては *Qui est* が最適だと、トマスはディオニシウスに従って主張している (632-636)。神名としての *ens* とは *Qui est* のことで、これを最適な神名とする見方は『神学大全』⁴¹と一致する。

ens が特殊な発出を表示するに対し、*bonum* が普遍的発出を表示するとされていることの一つの理由は、*bonum* が *ens* とは異なり第一質料に対しても原因として働くことである (226)。しかし、現実に存在している対象に対しては、両者は等しい実

在領域で原因性を発揮していると言える (506)。可能的に存在するのではなく現実存在する被造物に、より根源的に見出される完全性は存在なので、結果を通しての神への命名という手順に従うと、神名としては *Qui est* が最適だということになるのである。しかし勿論、存在の発出が遂行されている時、善性の発出が併存する。従って、現実存在している対象に関しては善も存在も領域を同じくし、即ち、両者は共に最大の共通性を備えており、両発出は万物にくまなく及んでいる (669)。それ故、最大の共通性を備えた *bonum* と *ens* は共に、発出範囲が万物を対象としているという意味で、「普遍者 (*universale*)」と呼ばれる (102)。つまり、神が実在する万物に対し普遍原因として関係していることが、「普遍者」という概念によって表現されているのである。これが分類①の *bonum* と *ens* に与えられている、「共通性」という性格の意味する所である。

しかし、神の普遍原因としての作用は、分類①に限って見られるものではない。トマスによれば、神の善性により被造物には、(1)それ自身が存在し完成されること、(2)相互に関係づけられること、(3)目的へと秩序づけられること、が帰される (262)。これを仮に三段階と呼ぶことにすると、第(1)段階は神名の分類①に対応し、第(2)段階は分類②③④に、第(3)段階は分類⑥⑦に対応しており、ここに〈発出——還帰〉の構造が現れていると言える。なぜなら、まず神から発出した完全性によって、被造物がそれ自身完全なものとして存在していることを、第(1)段階の分類①が示し、次にそれら個々の被造物を他者との相互関係の中で捉えた第(2)段階が、分類②③④であり、これら二段階を包摂する形で、最後に第(3)段階の分類⑦で言う摂理の目的とは、「個々のものが固有な完全性を獲得し、更に万物が一なる目的へと還元されること」(957)だからである。そして、この構造全体を分類⑥の *Deitas* が取り仕切っていると言えよう。三段階を通して発出が一つの目的を目指して進められているのである。つまり、第(1)段階から第(3)段階への過程で、一貫して神の善性が機能していることに注目すると、分類①から分類⑦への過程全体の構造が、被造物が神から発出し究極目的としての神に還帰するという、神の摂理を表していると言える。神は自己の善性を伝達することによって摂理を遂行する (948)。そもそも完全性の受け渡しは摂理によってなされ、神名はいずれも神の摂理を明示している (611)。万物を対象とする善性と存在の発出を遂行し、一なる目的へと向かわしめている神の摂理を明示する神名として、*bonum*, *ens*, *unum*, *Deitas* の四者は、特に神に適合する名とされるのである。

要するに、万物を対象とする普遍原因の摂理を、即ち、無限者たる「正に神たるもの」の無限な活動を、四つの神名は物語っているわけである。これは *Deus* という言葉の語源が、普遍的摂理であることと符合する (948)。

Ⅳ 〈イデアと超越的一般者〉

最後に四つの神名をイデアと超越的一般者との連関の下に考察したい。とりわけ注目に値するのは、四つの神名の持つ「共通性」という性格が、トマスがイデアに言及する際にも (pr. II), *bonum, ens, unum* の三者に対しての「最高に共通なもの (*maxime communia*)」という規定として与えられていることである。ここで超越的一般者が神名論とイデア論との媒介として機能していることに気付くが、「最高に共通なもの」という規定の意味内容は、先程共通性について述べた、神の摂理を物語るといふことであると考えて行くことができる。

トマスはプラトン派による自然本性的事物の離存形象の措定に対し、信仰にも真理にも一致しないと批判する一方、この種のイデアとは峻別されたイデア、即ち、「善性・一性・存在の、本質そのものたる一なる第一のもの」の措定に対しては、最も真実でありキリスト教の信仰に一致すると絶大なる賛辞を呈している。後者のイデアをトマスはキリスト教の神と見做し、神から全ての善きもの、存在するもの、一なるものが派生するとした。 *bonum, ens, unum* が最高に共通なものであり得るのは、従ってまた超越的一般者であり得るのは、善性と一性と存在が一体的に捉えられている神を、より厳密には神の類似性を、分有しているからである。そして、 *bonum, ens, unum* という「最高に共通なもの」への抽象の適用によって、ディオニシウスが神を、例えば善そのものと名付けていた、とトマスは考えている。これがトマスの認めたイデア論である。このようなトマスの受け入れたイデア論によって含意されているのは、原因と結果とに同一の名を付け得ることと、結果の原因に対する依存関係との二点である。これら二点は実に神名論の要ともなっているのである。なぜなら、万物は分有によって神に類似しているものとして位置付けられており、原因が結果に与える類似性に基づいて神名論は成立するが、結果が卓越的に原因の内に先在していると言われる時に含意されているのは、結果が原因に依存していることだからである (832)。イデア論が単に命名を事とするだけではなく、実在界の依存関係も描写しているように、神名論も実在を描写しているのである。

アリストテレスは、個々の存在、個々の一とは別に離存している存在や一を、原因として認めていない。しかし、トマスはプラトン派が「最高に共通なもの」について措定したイデア論を積極的に承認する。アリストテレスとは異なり、個々の存在、一に対応する原因を措定していることから、トマスの説く超越的一般者は、自ずとアリストテレスとは異なる方向へと進み、神について語ることに向けられるようになったと言えよう。bonum, ens, unum などの超越的一般者が、どの範疇にも限定されなれないという事実は、神の摂理に基づく世界を描写しながら、その根拠の描写へと、つまり、神の摂理そのものの描写へと、重きが置かれるようになったと考えることができるのである。

註

- 1) 例えば稲垣良典氏、「『在るもの』と『善』——トマス transcendentia 論の一考察」(『哲学年報』43)。
- 2) 以下、小稿では、マリエッティ版『ディオニシウス神名論注解』に付されている番号を括弧内に記した。
- 3) W. J. Hankey は、『神学大全』第 I 部 qq. 1-45 の様々な箇所、新プラトン主義の〈発出—還帰〉の構造を見出す (*God in Himself, Aquinas' Doctrine of God as Expounded in Summa Theologiae*, Oxford, 1987)。私が神名論の文脈として注目した qq. 2-13 も例外ではない。同じ構造が『注解』にも見られるのである。
- 4) S.T., I, q. 13, a. 11, c. でトマスが三つの根拠から Qui est を最適な神名と見做す際にも、「共通性・普遍性」が一つの重要な根拠として枚挙されていることに注意。